Tsukuba Psychological Research
1989, 11, 49-56

自己開示の評定に及ぼす評定者の個人差の影響

筑波大学大学院（博）心理学研究科　遠藤　公久[1]

筑波大学心理学系　竹村　研一

Influences of evaluator's personality and self-disclosure level upon the judgement of self-disclosure content and impression of discloser.

Kimihisa Endo, Yasutomo Uetake, and Ken-ichi Takemura (*Institute of Psychology, University of Tsukuba*, *Tsukuba* 305, *Japan*)

Two hundred and ninety-two subjects were requested to rate questionnaies of personality and self-disclosure as measurements of personal characteristics. Then after reading four scenarious, they evaluated disclosure contents (intimacy and desirability) and impression toward each discloser. 1) Subjects (Ss) with high-disclosure level evaluated any of the four scenarios as more intimate; 2) male Ss with high public consciousness rated undesirable disclosure scenarios as less desirable; 3) lonely Ss evaluated any scenario less favorably and rated the impression of the discloser as less familiar; and 4) three factors (social desirability, activity, personal familiarity) were extracted from the impression of the disclosers. These factors were similar to the "fundamental three dimensions in perceiving personality" (Hayashi, 1978).

Key words : self-disclosure, evaluator's personality, evaluator's disclosure, disclosure contents, impression.

他者が知覚しうるように自己の情報を公開することを自己開示 (self-disclosure) という．これまで自己開示の測定方法には，自己報告法，観察評定法，さらに客観的測定法がとられてきた (Chelune, 1979)．自己報告法では，開示話題をあげ，個々の話題についてどの程度重要な他者 (significant others) に話してきたかの評定を求めるもので，代表的な自己開示質問紙としてJSDQ (Jourard Self-Disclusure Questionnaire) があげられる．観察評定法では，録音録画された自己開示，TAT（主題統覚検査）や文章完成法などの投影法による開示，さらに自己描写文などについて，数名によって開示の内面性などが評定される．客観的測定法では，開示された内面性の情報量 (例：自己描写の語数)，開示の時間や割合（例：自分について話す時間，会話中の自己言及の割合）などが指標とされている．

このなかで観察評定法においては，熟練者による評定であるものの，さまざまな観察者バイアスが生じる可能性が考えられる．Chelune (1979) は，観察者の立場（参加者的立場 (participant) か傍観者的立場 (bystander) か)，対比効果，観察者のステレオタイプな期待，そして観察者の個人的諸特徴と被験者のそれとの交互作用，を指摘している．

例えば，観察者の立場がその場の対人的相互作用に直接的に加わった参加者的なものなのか，それとも相互作用とは間接的な傍観者的なものなのかによる観察見解の差異について，Chelune (1979) は前者の見解のほうがより好意的な評価であるとしている．自己開示が被開示者（評定者）に与える快楽関与性 (hedonic relevance) からすれば，参加者的立場のほうが傍観者的立場よりも自我関与の程度が高

1　なお，本研究は，学類生植竹康朋君の協力なしには実現できなかったものである．ここに感謝の意を表したい．

いであろうし，その意味で開示内容が同じであってもその（人物）評価が参加者的立場のほうがより好意的になるのは当然のことかもしれない．

また，Kleinke (1979) が自己開示の評定に影響する要因の一つとしてあげているように，観察者（評定者）間の個人差も観察者バイアスと重要な関わりを持つものであろう．そこで，以下に評定者の個人的諸特徴として，評定者自身のパーソナリティ，自己開示レベル，性を取り上げ，これらが開示評定に及ぼす影響について言及する．

評定者のパーソナリティが開示者や開示内容の評価にどのような影響を与えるであろうか．例えばChelune (1977) は，見知らぬ人に中程度な開示をすることよりも，高い開示をすることをより不適切であると判断する人は，自己開示柔軟性（self-disclosure flexibility）が高いことを示した．またこのような傾向は，特に女性に顕著にみられるものであった．自己開示柔軟性とは，自己の置かれた様々な状況に応じた適切な開示レベルを判断できる対人能力の一つである．

またChaikin, Derlega, Bayma, & Shaw (1975) は，MPI（Maudsley Personality Inventory）で神経症的傾向が低い者（男性）は，相手が深い自己開示をすると高い返報性（相手の開示レベルに合致した開示をすること）を示すが，神経症的傾向が高いと相手の開示の深さに関係なく標準的な開示をする，すなわち低い返報性を示す，としている．Cunningham & Strassberg (1981) によっても同様な報告がなされている．

さらにSolano, Batten, & Parish (1982) は，孤独感の強い者は弱い者よりも自分を相手に知らせることができず，相手の開示の親密度を正確に認知する感受性に欠けているとしている．ここでは，予め抽出された孤独感の強い被験者と弱い被験者とが，相互に12の話題を選択してそれについて話し，その後にお互いにどのくらい知り合えたと思うかを評定した．その際，必ずその組のどちらかが孤独感の弱い者になるように操作された．その結果，孤独な者は同性の相手と一緒の時は親密度の高い話題を選択し，異性の相手と一緒の時は低い話題を選択した．一方孤独感の少ない者はその反対の選択をする傾向が見い出された．またこのように相手の性によって話題の親密度を変えるばかりでなく，孤独な者は自分を相手にうまく知らせることができなかった．さらに相手の話題の親密度の高低にかかわらず，同じように親密度を高く認知する傾向があると報告されている．

その他にも評定者側の対人志向性（中村，1986）などの影響についても報告されており，重要な媒介変数であるといえよう．

評定者自身の自己開示傾向とその評定者がどのように他者の自己開示を認知するかということの間には，どのような関係がみられるであろうか．Lawless & Nowicki (1972) は，予め開示レベルを測定しておいた評定者を高開示群と低開示群とに分け，隣室にいる人物からの開示を聞かせた（実際は録音されたテープで，高開示と低開示の2水準あった）後に，その人物に対する対人魅力などを評定させた．その結果，高開示群の評定者は，低自己開示の人物よりも，高自己開示の人物を好意的に評価していた．また，Daher & Banikiotes (1976) は，予め被験者を高開示者と低開示者に分け，被験者の自己開示内容と類似した人物と類似していない人物の開示内容のリストを被験者に呈示し，その全く未知な人物に対する対人魅力を評定させた．その結果，開示内容の類似性は，その個人の魅力とポジティブな関連性がみられた．さらに，類似性の高い開示内容でも親密さの高い開示を受けた場合，高開示者は低開示者よりも相手の対人魅力を高く評定していた．このように高開示傾向の評定者は，低開示な評定者よりも高開示な相手を好意的に評価する傾向があるようである．

開示される側の性も開示者や開示内容への評価に少なからず影響を与えているに違いない．しかし男性と女性でどちらのほうが開示的であるかといった議論が必ずしも一貫した結果を得ていないように（Cozby, 1973），男性と女性によるこのような評価においても一貫した知見は得られていない（Kleinke, 1979）．

そこで，本研究では評定者側の個人差要因に注目し，評定者の性格特徴や自己開示傾向などが開示内容（深さや望ましさ）の査定や開示者の対人魅力の評定にどのように影響を及ぼすかについて検討することにした．その際に，性格特徴として，ここであげた神経症的傾向と孤独感に加えて公的・私的自意識も取り上げた．特に自分がどのように他者からみられているか（公的自意識）は，相手の自己開示の内容（内面性や望ましさ）に対する評定にも影響すると考えられたからである．

方　法

実施日：1987年10月下旬
対象者：男女大学生　292名（男子147名，女子145名）
質問紙の構成（開示内容の属性）：

中村（1986）を参考にし，浅い開示話題（学生生活，友人関係）と深い開示話題（恋愛経験，印象に残る出来事）の4話題をとりあげ，各話題について社会的に望ましい内容(＋)と望ましくない内容(－)のシナリオを作成した．したがって，合計8つのシナリオが作成された．そしてその4話題8つのシナリオの中から，浅い開示で望ましい内容(浅＋)，浅い開示で望ましくない内容(浅－)，深い開示で望ましい内容(深＋)，そして深い開示で望ましくない内容（深－）を無作為に選択し一人の被験者に呈示した．したがって，全呈示刺激の中に占める深さや望ましさの割合がそれぞれ50％になるようにした．また，呈示順序はランダムに配列した．なおシナリオの深さや望ましさについては，予備調査でそれぞれが別次元を構成することが確認されている．

個人差変数：

1） 性格特徴

① 孤独感尺度―工藤・西川（1983）から20項目が抽出された．「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までを1から7とした7件法を用いた．

② 神経症的傾向尺度―MPIより，neuroticism尺度全24項目と，5項目の虚偽発見尺度を抽出した．「はい」を2点，「どちらでもない」を1点，「いいえ」を0点とする3件法が用いられた．

③ 自意識尺度―菅原（1984）から，公的自意識11項目，私的自意識10項目が選択された．「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までを1から7とした7件法をそれぞれ採用した．

2） 自己開示傾向

① JSDQ改訂版―加藤(1977)を参考にし，身体，趣味，学校・勉強，パーソナリティー，意見，対人関係，金銭の7話題からそれぞれ2項目合計14項目を選択した．各項目について，父，母，同性の友人，異性の友人に対して，「そのことについては何も話さない」を0，「話すことは話すがそれほど深く話さない」を1，「十分に詳しく打ち明けて話す」を2とした．

② 開示状況質問紙（以降DSSRと略）―Chelune（1976）のSDSS（Self-Disclosure Situations Survey）をもとに遠藤（1987）が作成した．開示標的人物との関係レベル，その人数，開示場所の3要因から構成された18項目からなる．評定法は，1を「私ならこういう時があっても，表面的な話しかしたくないだろう」，6を「こういう時には自分の感情や考えを相手に分かってもらうように，できるだけ詳しく話そうとするだろう」として，1～6の番号を選択記入させた．

①は各話題に対する過去の開示経験や習慣的側面を測定し，②は自己の置かれた状況における積極的な開示意向を測定する．

従属変数：

中村（1986）を参考にした．各話題については知覚された開示内容の内面性，深刻さ，衝撃性，望ましさ(世間一般からみた)，不自然さを7件法で評定させた．また話題全体を通して，話し手の聞き手に対する知覚された真正性，好感，信頼性などを7件法で評定させた．さらに，開示者の人物像に対する印象も林（1978）を参考に13の形容詞対を7件法で評定させた（Table 3）．

手続き：

質問紙法で一斉に実施された．開示内容は2人の女子大生の模擬面接場面での書き起こしであるとした．評定は聞き手ではなく，第三者として判断するように求めた．質問紙は，評定者の負担を軽減するために，性格特徴，自己開示傾向からそれぞれ一つを選択し，さらに4話題のシナリオ，各話題の開示内容に対する評定項目（内面性，深刻さ，衝撃性，望ましさ，不自然さ），4話題全体を通した評定項目（上記の評定項目に加えて，知覚された真正性，好感，信頼），そして開示者の印象評定項目とを無作為に配列した．その結果，孤独感尺度が98名(女子49名)，神経症的傾向尺度92名（女子47名），自意識尺度97名（女子47名），JSDQ改訂版138名（女子64名），DSSR 140名（女子76名）であった．

結果と考察

1．開示傾向と開示内容の評定との関係

開示傾向と開示内容の評定との関係を調べた（Table 1）．JSDQ改訂版とDSSRでは開示傾向の質的に違った側面を測定している．JSDQ改訂版は過去の開示経験を測定するのに対して，DSSRは積極的な開示意向を測定しようとしている．この違いが，開示内容の評定との関係においても異なった影響を与えたものと思われる．JSDQ改訂版との関係では，開示経験が高くなるにつれて，開示内容をより深刻で，不自然でないと知覚する傾向がみられた（$r=.17, -.18$，共に$p<.05$）．また，DSSRでは，積極的な開示意向が高くなると，話し手は聞き手をより信頼し，本当のことを言っていると知覚していた（共に$r=.17$，$p<.05$）．

さらに4話題全体を通しての評定ではなく，各話題ごとの評定と開示傾向との関連をみてみると，DSSRの得点の高い者は，各話題とも開示内容の深さや望ましさに関係なく，開示内容をより内面性の高い開示として評定する傾向がみられた（.17≦

Table 1 開示傾向と開示内容の評定との関係

	*JSDQ*改			*DSSR*		
	男性 (74)	女性 (63)	全体 (137)	男性 (64)	女性 (75)	全体 (139)
開示内容の内面性	.13	.20	.12	−.01	.20[a]	.12
知覚された深刻さ	.20[a]	.10	.17*	.08	.06	.07
知覚された衝撃性	.16	−.03	.07	.21[a]	.05	.15
開示内容の望ましさ	−.05	−.20[a]	−.15[a]	−.05	.06	.07
話の不自然さ	−.20[a]	−.23[a]	−.18*	−.01	−.17	−.11
知覚された真正性	.08	.14	.11	.01	.26*	.17*
知覚された好感	.15	.11	.10	−.01	.22*	.12
知覚された信頼	.10	.04	.07	−.01	.32**	.17*

**$p<.01$ *$p<.05$ [a]$p<.10$ ( ) 内の数字は対象者数

Table 2-a 性格特徴と開示内容の評定との関係

	公的自意識			私的自意識		
	男性 (50)	女性 (46)	全体 (96)	男性 (50)	女性 (46)	全体 (96)
開示内容の内面性	.05	.16	.09	−.08	−.11	−.11
知覚された深刻さ	.06	.09	.07	−.12	−.03	−.10
知覚された衝撃性	−.06	.19	.05	−.13	.02	−.08
開示内容の望ましさ	−.03	−.12	−.07	−.21	−.16	−.20*
話の不自然さ	−.06	.05	−.01	.06	−.03	.02
知覚された真正性	.08	.02	.05	−.13	−.06	−.06
知覚された好感	.14	−.04	.06	.07	.09	.06
知覚された信頼	−.12	−.04	−.05	−.30*	−.11	−.21*

*$p<.05$ ( ) 内の数字は対象者数

Table 2-b 性格特徴と開示内容の評定との関係

	孤独感			神経症的傾向		
	男性 (49)	女性 (48)	全体 (97)	男性 (45)	女性 (47)	全体 (92)
開示内容の内面性	−.35**	−.19	−.29**	−.13	−.02	−.09
知覚された深刻さ	.07	.01	.04	−.08	.14	.05
知覚された衝撃性	−.03	−.20	.08	.11	.05	.08
開示内容の望ましさ	−.55**	−.08	−.35**	.03	.08	.03
話の不自然さ	.33*	.02	.20*	.37**	−.05	.12
知覚された真正性	−.30**	−.28*	−.28**	.05	.10	.07
知覚された好感	−.12	−.41**	−.22*	−.11	.16	.01
知覚された信頼	−.10	−.01	−.09	.03	.21	.12

**$p<.01$ *$p<.05$ ( ) 内の数字は対象者数

$r\leqq.26$, $p<.05$)．特にその傾向は女性で顕著であった（$.19\leqq r\leqq.26$)．開示内容の内面性についての評定では，積極的な開示意向の高い者（特に女性）は，自己の開示傾向に類似するように相手の開示の内面

性をより深く判断する傾向があることが示唆された．

2．性格特徴と開示内容の評定との関係

開示内容の評定と性格特徴との相関関係を調べたところ，Table 2-a，Table 2-bのような結果を得た．

公的自意識と開示内容に対する評定との間には有意な関連性が認められなかった．また，私的自意識との間では，私的自意識の高い者は，開示をより望ましくなく($r=-.20$，$p<.05$)，また話し手は聞き手を信頼していない（$r=-.21$，$p<.05$）というように知覚していた．特に，その傾向は男性で著しかった．そこで，各話題ごとの評定との関係を見ると，公的自意識の強い男性は，開示の深さに係わりなく望ましくない開示内容に対して，一層望ましくなく評定するといった興味深い傾向がみられた（浅－：$r=-.33$，$p<.05$，深－：$r=-.35$，$p<.01$）．また，公的自意識の強い女性は，深い開示内容に対して，その世間一般的望ましさに係わりなく，より内面性の高い開示と知覚する傾向が認められた（深＋：$r=.41$，$p<.01$，深－：$r=.26$，$p<.10$）．公的自意識は，社会的に自分がどのようにみられているかへの関心の強さを示す．したがって，この意識が高い人は社会的規範に対しても敏感であると推測される．その意味から公的自意識の高い人（特に男性）が，社会的に望ましくない開示をされたときに，その世間一般的望ましさを，この意識の低い人に較べて，低く評定したことは了解可能なものといえよう．

孤独感の強い者は，開示をより不自然であると知覚し（$r=.20$，$p<.05$），開示の内面性（$r=-.29$，$p<.01$），望ましさ（$r=-.35$，$p<.01$），真正性（$r=-.28$，$p<.01$），聞き手への好感（$r=-.22$，$p<.05$）を低く評定する傾向が認められた．つまり，孤独感が高い人は，そうでない人よりも，開示を不自然であると疑いやすく，また開示内容を全般的に否定的に捉えやすい傾向がうかがわれた．このことは，従来いわれてきた孤独感の高い者は対人反応が低いという知見を支持するものと言えよう．そこで，4つの開示話題それぞれについての評定との関連を調べると，各話題の深さ，社会的望ましさに関係なく，その内面性の知覚においてそれぞれ低く評定する傾向がみられた（$-.22\leqq r\leqq-.41$，$p<.05$）．特にこれは男性に顕著な傾向であった（$-.29\leqq r\leqq-.53$，$p<.05$，ただし深－は$r=-.16$で$n.s.$）．そのなかでもとりわけ浅＋，深＋な話題をより内面性の低い開示であると評定していた（$r=-.45$，$-.53$）．このことは孤独感の強い男性は，社会的に望ましい開示内容に対しては，一様にその内面性を低く評定する傾向があると思われる．

神経症的傾向と開示評定との間には，これといった顕著な特徴は見い出されなく，この傾向の高い男性が開示内容全般を不自然に知覚する傾向がみられるにとどまった($r=.37$，$p<.01$)．本研究では，開示の返報性については検討していないが，開示内容の評定と神経症的傾向とには関連性がみられないようである．これは，さらに検討の余地があるであろ

Table 3　対象者全体の印象形成評定尺度の因子負荷量（回転後）

		第 I 因子	第 II 因子	第 III 因子	共通性
無分別な	分別のある	－.75	.06	－.19	.60
誠実な	不誠実な	.74	.09	.12	.58
安定した	不安定な	.70	－.06	－.11	.51
成熟した	未成熟な	.70	－.10	.02	.50
慎重な	軽率な	.66	－.41	.14	.63
正直でない	正直な	－.58	－.46	－.03	.55
肯定的な	否定的な	.47	.36	－.19	.38
あけっぴろげな	かくしだてする	.07	.74	－.08	.55
無口な	おしゃべりな	.35	－.64	.18	.56
なれなれしい	よそよそしい	－.28	.62	－.07	.46
近づきがたい	人なつっこい	－.18	－.59	－.14	.40
自分（あなた）に近い	自分（あなた）と遠い	.25	.09	.77	.66
わけへだてのある	わけへだてのない	－.13	－.17	.72	.56
2乗和		3.41	2.25	1.29	6.95
寄与率		.26	.17	.10	.53

う．

3．開示者に対する印象形成

開示者に対する13の印象評定項目について，13×13の項目間相関行列を算出し，これを主因子法により因子分析した．固有値≧1.0を基準にしたところ，3因子抽出された．この3因子によって全分散の53.4%が説明されていた．そこで第III因子までをバリマックス法により回転させた．Table 3は回転後の因子負荷量を示したものである．

各因子の解釈には，林（1978）が有用なので参考にした．第I因子に高い負荷量を示したのは，「無分別な—分別のある」「慎重な—軽率な」「正直でない—正直な」「安定した—不安定な」「誠実な—不誠実な」「成熟した—未成熟な」「肯定的な—否定的な」であった．これは『社会的望ましさ』を表す因子と解釈された．また，第II因子では「無口な—おしゃべりな」「あけっぴろげな—かくしへだてする」「近づきがたい—人なつっこい」「なれなれしい—よそよそしい」で高い負荷を示しており，『活動性』の因子であると解釈された．第III因子は，「わけへだてのある—わけへだてのない」「自分（あなた）に近い—自分（あなた）と遠い」において高い負荷量を示しており，『個人的親しみやすさ』の因子であると解釈された．

林（1978）は，人が他者のパーソナリティを認知する場合には，「社会的望ましさ」（知的・課題関連的評価における尊厳の判断）と，「個人的親しみやすさ」（社会・対人的評価における好感の判断）と，「活動性」，の3つが基本次元として対人認知構造を構成するとしている（Fig. 1）．本研究でも，このことが支持されたと言ってもよさそうである．しかし，評定尺度に偏りもみられ，不十分であり，さらに項目を検討する必要があると思われる．

4．開示者への印象評定に及ぼす個人差変数の影響

第III因子までの因子得点を算出し，まず性差について検討した．その結果，第I因子（社会的望ましさ因子）では，男性のほうが女性よりも高く評定する傾向がみられた（$t(280)=2.52$, $p<.05$）．反対に女性は男性よりも第II因子（活動性因子）における印象を高く評定していた（$t(280)=-2.43$, $p<.05$）．また，第III因子（個人的親しみやすさ因子）で

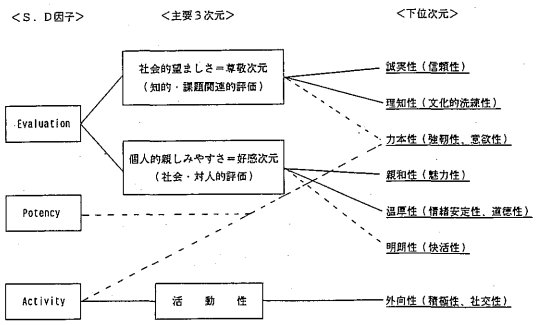

Fig. 1　対人認知構造を構成する基本次元（林，1978）

Table 4　各因子得点と開示内容の評定との相関関係（全体）

	第I因子『社会的望ましさ』		第II因子『活動性（外向性）』		第III因子『個人的親しみやすさ』	
1．開示内容の内面性	.28(280)	**	.30(280)	**	.19(280)	**
2．知覚された深刻さ	.04(280)		.11(280)	a	.09(280)	
3．知覚された衝撃性	.04(280)		.06(280)		.12(280)	*
4．開示内容の望ましさ	.43(280)	**	.01(280)		.05(280)	
5．話の不自然さ	−.50(280)	**	−.09(280)		−.08(280)	
6．知覚された真正性	.37(279)	**	.23(279)	**	.14(279)	*
7．知覚された好感	.56(280)	**	.14(280)	*	.14(280)	*
8．知覚された信頼	.42(280)	**	.31(280)	**	.17(280)	**

数値は相関係数　（　）は人数　**$p<.01$　*$p<.05$　a$p<.10$

は，このような性差はみられなかった．このことから，男性は一般に他者の自己開示に対して，その人物の印象評定を『社会的望ましさ』の次元によって判断することが多くみられるのに対して，女性は『活動性』の次元によって印象判断することが男性に比べて強いことが示唆された．そして，『個人的親しみやすさ』といった好感次元による対人的評価には性差がないように思われる．

次に因子得点と開示内容との関連性を検討した（Table 4）．その結果，総体的に第Ⅰ因子と開示内容との関連性が高いことがわかった．開示者を社会的に望ましい人物だと評価していた者は，開示の内面性をはじめとして全般的にポジティブ（好意的）に評定していたことがわかる（$.28 \leqq r \leqq .56$, $p < .01$）．また，話の不自然さを低く判断していた（$r = -.53$, $p < .01$）．同様に，第Ⅱ因子や第Ⅲ因子にも肯定的に評定していた者は，相手の開示を好意的に評価していたといえよう．とりわけ，第Ⅰ因子（『社会的望ましさ』の対人認知次元）は，開示の内容の評定と深い関連のあることが分かった．

また因子得点と個人差変数との相関係数を算出した．その結果をTable 5に示す．評定者の開示傾向と開示者に対する印象判断との間には特別な関係は見い出されなかったが，DSSRで測定される積極的開示意向の高い者は開示者を社会的に望ましく，また個人的に親しみやすいという印象を持っていたことがうかがわれる（ともに$r = .16$, $p < .10$）．また，孤独感の高い者はそうでない者に比べて，開示者に対する『個人的親しみやすさ』を低く評価していた（$r = -.27$, $p < .01$）．特にその傾向は男性において著しいものであった（$r = -.40$, $p < .01$）．またここでも性差がみられ，開示内容の評定のみならず開示者に対する印象形成においても性格特徴や開示傾向と共に，性要因が重要な変数であることが再確認された．

最後に今後の課題として，本研究は評定者の立場を参加者的なものでなく傍観者的（第三者的）なものとしたが，今後は参加者的な立場による評定についても検討することや，また対人的相互作用をよりダイナミックなものとして捉えるために，開示の返報性に焦点をあてた検討も必要であろう．

引　用　文　献

Chaikin, A. L., Derlega, V. L., Bayma, B., & Shaw, S. 1975 Neuroticism and disclosure reciprocity. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 13-19.

Chelune, G.J. 1976 The self-disclosure situations survey: A new approach to measuring self-disclosure. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, **6**, 111-112.

Chelune, G.J. 1977 Disclosure flexibility and social-situational perceptions. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **45**, 1139-1143.

Chelune, G.J. 1979 Measuring openness in interpersonal communication. In Chelune, G.J. and associates, *Self-disclosure; Origins, patterns, and implications of openness in inter-personal relationships*, SanFrancisco: Jossey-Bass, 1-27.

Cozby, P.G. 1973 Self-disclosure: A literature review. *Psychological Bulletin*, **79**, 73-91.

Cunningham, J.A., & Strassberg. D.S. 1981 Neuroticism and disclosure reciprocity. *Journal of Counseling Psychology*, **28**, 455-458.

Daher, D.M. & Banikiotes, P.G. 1976 Interpersonal attraction and rewading aspects of disclosure content and level. *Journal of Personality and Social Psychology*, **33**, 492-496.

遠藤公久　1986　自己開示柔軟性と性格特徴との関連　日本教育心理学会第28回総会論文集 400-401.

Table 5　各因子得点と個人差変数との相関係数

	*JSDQ*改			*DSSR*			公的自意識			私的自意識			孤独感			神経症的傾向		
	男 (70)	女 (64)	全 (134)	男 (61)	女 (73)	全 (134)	男 (49)	女 (46)	全 (95)	男 (49)	女 (46)	全 (95)	男 (46)	女 (48)	全 (94)	男 (42)	女 (46)	全 (88)
第Ⅰ因子『社会的望ましさ』	.03	.15	.05	.02	.30**	.16[a]	−.31*	.08	−.14	−.31*	.09	−.14	−.04	−.26[a]	−.12	−.15	−.03	−.11
第Ⅱ因子『活動性』	.05	.06	.11	.06	.08	.06	.14	−.05	.01	.04	−.13	.07	.16	−.16	.00	−.18	.01	−.08
第Ⅲ因子『個人的親しみやすさ』	.07	−.13	.01	.12	.17	.16[a]	−.13	−.13	−.05	−.13	.03	−.01	−.40**	−.01	−.27**	−.01	.27[a]	.12

**$p < .01$　*$p < .05$　[a]$p < .10$　（ ）内の数字は対象者数

林　文俊　1978　対人認知構造の基本次元についての一考察　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），**25**，233-247.

加藤隆勝　1977　青年期における自己意識の機能　心理学モノグラフ№14　東京大学出版会

工藤　力・西川正之　1983　孤独感に関する研究（Ⅰ）——孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討——　実験社会心理学研究，**22**，99-108.

Kleinke, C.L. 1979 Effects of personal evaluations. In Chelune, G.J. and associates, *Self-disclosure: Origins, patterns, and implications of openness in interpersonal relationships*. San-Franciso: Josey-Bass, 59-79.

Lawless, W. & Nowicki, S. 1972 Role of self-disclosure in interpersonal attraction. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **38**, 300.

中村雅彦 1986　自己開示の対人魅力に及ぼす影響(2)——開示内容の望ましさの要因に関する検討——実験社会心理学研究，25，107-114.

Solano, C.H., Batten, P.G., & Parish, E.A. 1982 Lounliness and patterns of self-disclosure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 524-531.

菅原健介　1984　自意識尺度日本語版作成の試み　心理学研究，**55**，184-188.

—1988. 9 .30 受稿—